東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

国際理解教育に視点をあてた中学校食物領域の指導：帰国生との比較から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山崎,真澄, 池崎,喜美恵 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/108117

東京学芸大学紀要　総合教育科学系Ⅱ　62: 209－217，2011.

国際理解教育に視点をあてた中学校食物領域の指導

―― 帰国生との比較から ――

山　崎　真　澄*・池　﨑　喜美恵**

家庭科教育学

（2010年9月27日受理）

Ⅰ　はじめに

国際化の進展に向けて，子どもたちの教育環境は変容しつつある。例えば，クラスには数年間の海外生活を経験した帰国生や外国人子女がいることがある。このように日本で生まれ育った子どもだけでなく，海外での生活経験を有する子ども，外国籍の子どもなど教室の中も国際化が進展している。そこで海外に渡航する学童期の子どもを調べたところ，平成19年度文部科学省の調査によれば，海外長期滞在者の数は一時期減少したが，平成７年から年々増え続けている[1)]。以前は親が海外転勤をする場合，自分の子どもの生活環境が変化してしまうため，同伴させないという現実があった[2)]。また，就学形態別にみると日本人学校および補習授業校に通う生徒が減少している一方，現地校に通う生徒が増加している[3)]。しかし，現地校では家庭科の授業を実施している学校が少ない[4)]ことから，家庭科を未学習のまま帰国する生徒が今後，増える傾向が考えられる。

ところで，一般の子どもは定型化された学習課題を規則的，系統的に学習していくという学習スタイルをとる傾向が強い。しかし，帰国した子どもは，学習に際してあらかじめ課題が構造化されておらず，自ら経験的に学習していく中で，学習したものを自分で構造化していくという学習スタイル[5)]をとると言われている。そのため学習スタイルに応じた指導スタイルを考え直す必要があると考え，国際理解教育の観点に着目した。

国際理解教育の目的の１つは，環境問題など国際社会の現実の内容を学習の目標とする「目的」としたものである。２つ目は，国際社会で必要とされるコミュニケーション能力，表現力など個人的資質の育成をめざす「手段」としたものである[6)]。一般生はコミュニケーション能力や表現力を高めるために，帰国生には，自ら経験的に学習し，構造化して学習をすることができるようにするため授業を考案した。つまり，授業を講義型ではなく，ディスカッション形式で各国の主食の違いを発表する授業を行った。また，和食と洋食の配膳方法から食文化を理解する授業を展開した。このような，国際理解教育を取り入れた，生徒主体の授業を実践し，一般生と帰国生の家庭科授業における特質を検討した。

Ⅱ　目的

帰国生と一般生が共に在籍する学校に勤務した際，日本語の理解が乏しい生徒や家庭科が未学習である生徒など，海外生活により特異な生育歴や学習歴を有している生徒がいることがわかった。そこで，混合クラスで授業をするにあたり，帰国生も一般生も授業が「分かった」「面白い」「実践したい」と感じることができる授業を実践したいと考えた。

帰国生の中には年中行事における行事食を食べたことがない生徒も多いことから，食物領域の中で特に年中行事に関連する行事食や食器の配膳に着目した。平成18年度に東京書籍出版の学習指導案を参考に「食文化→栄養→配膳→食品表示」という授業計画を実施した。その結果，配膳に関する知識が低いことが判明し

＊　高等工科学校
＊＊　東京学芸大学教育学部

た。平成19年度に「配膳→食文化→栄養→食品表示」という授業計画をたて，授業を行った。授業構成の順序を変え，調理実習の試食の際，配膳を意識させるなど，意識する機会を多くさせることで知識の定着に変化があると考えていたが，知識は定着しなかった。そこで平成19年度の授業方法の反省を活かし，帰国生も一般生も共に理解しやすく知識が定着する授業を実施することとした。本研究の目的は以下の３つである。

１つ目は国際理解教育に視点をあてた授業方法を取り入れ，配膳と年中行事に関連する行事食を学ばせ，日本の食文化の背景を理解させることである。

２つ目は，混合クラスの特質を活かすことができる授業を実践し，帰国生が今まで体験してきたことを聞き，互いの意見を発表し合いながら授業を進め，相互啓発をすることができる授業をすることである。

３つ目に帰国生と一般生との間に差異があると感じているが，両者の間に家庭生活においてどのようなところに特性があるかを明らかにし，帰国生が参加しやすい授業を検討することである。

Ⅲ　方法

１．調査対象者

調査対象者は東京都私立Ｋ中学２年生117名（Ａ・Ｃ組一般生47名，帰国生14名，Ｂ・Ｄ組一般生39名，帰国生17名）を対象にプレテスト，ポストテスト，定着度テストを平成20年６月から12月に実施した。アンケートの回収率は100％である。また，分析には統計ソフトSPSSを使用し，単純集計やクロス集計を行った。

２．実施期間及び内容

Ａ・Ｃ組では，プレテストを食物領域の授業に入る前，ポストテストを食物領域が終わった後，定着度テストを２学期の期末テスト前に実施した。

Ａ組・Ｃ組：プレテスト（９月上旬）
　　ポストテスト（10月下旬）
　　定着度テスト（12月上旬）

Ａ組・Ｃ組は国際理解教育の視点を取り入れた授業を実施した。以下「国際理解教育クラス」と示す。

Ｂ・Ｄ組では，プレテストを食物領域の授業に入る前，ポストテストを１学期の期末テストの後，定着度テストを夏休み明けに実施した。

Ｂ組・Ｄ組：プレテスト（６月上旬）
　　ポストテスト（７月中旬）
　　定着度テスト（９月上旬）

Ｂ組・Ｄ組は一般的な授業を実施した。以下「通常教育クラス」と示す。

３．調査内容

①　知識に関する項目

中学校技術・家庭（家庭分野）の食物に関する内容のうち食生活の現代的問題，栄養素，調理，配膳，食品表示の知識について合計50点満点のテストを実施した。

②　食生活と健康状態に関する項目

食生活意識の実態に関する内容で食事摂取に対する配慮，食物知識に関する情報源，食事における家族との関わり，手伝い状況，健康状態に関する体調の変化について調査した。

４．授業展開

食物領域に関する授業は４回実施した。

第１次（2）　配膳から食文化を理解
第２次（2）　栄養素
第３次（2）　食品の選択
第４次（2）　調理実習

筆者は「配膳から食文化を理解」に関する授業のみを実践し，配膳以外の食物領域の授業は研究対象校の教員が実践した。

また，国際理解教育クラスでは国際理解教育の視点を取り入れるように授業案を考え，導入で帰国生から現地での生活状況について聞き，その後一般生に日本食の食生活について聞く内容とした（表１）。通常教育クラスでは，導入で年中行事と行事食の関係について説明し，旬の食材，配膳を理解するという「配膳の理解」にポイントを置き授業を実践した（表２）。

共に生徒が意見を発表し，自分たちが持っている知識と相手が持っている知識を共有できるように心がけた。

本報では，知識の点数の合計と筆者が担当した配膳の部分のみのデータ分析を掲載することとした。

Ⅳ　結果

１．知識に関する合計得点

食生活の現代的問題，栄養素，調理，配膳，食品表示の知識に関する合計得点について分析する。図１の「知識テストの合計得点」に示すように，プレテストでは帰国生のほうが家庭科の未学習の現状などもあり，平均は低いが，ポストテストと定着度テストでは

表１　国際理解教育クラス授業の流れ（A・C組）

	学習内容	学習活動	指導上の留意点　＊評価
導入 10分	料理の特徴	各国の食事の特徴を発表する 例）日本・・・米が主食 　　フランス・・・肉が主食	・世界の国々の料理の特徴を質問する ・日本とフランスの食事の違いを発表させる ＊　帰国生は滞在国の料理の特徴を思い出し，一般生は日本料理の特徴を思い出すことができたか （関心・意欲・態度）
展開 30分	各国の食文化 食器の配膳 ①配膳から旬について ②行事食について ③郷土料理について	・食器の並べ方について発表する ・わが国の食事の特徴から洋食器と和食器の配膳方法を学ぶ ・日本の風土の特徴などから和食器の配膳を学ぶ	・和食器と洋食器の配膳方法を質問する 主食の違いから配膳方法の違いを理解させる ・各国の食事の特徴が配膳に活かされていることを説明する ＊　和食器・洋食器の配膳方法について理解できたか （知識・理解） ・和食器の配膳から日本の食文化について理解する ①旬について理解させる ②行事食について理解させる ③郷土料理について理解させる
まとめ 10分	本時のまとめ	・本時の学習内容を理解する	・次時の内容を確認する （知識・理解） ＊　行事食と旬の食材の関連から和食器の配膳について理解できたか （知識・理解） ・次時の予告をする

表２　通常教育クラス授業の流れ（B・D組）

	学習内容	学習活動	指導上の留意点　＊評価
導入 10分	年中行事	・年中行事について発表する （お正月，クリスマスなど）	・年中行事にあわせた行事食をとりあげる ＊「年中行事」という言葉から思いつく事柄を発表できたか （関心・意欲・態度）
展開 30分	郷土料理と旬の食材 食器の配膳	・地域による食材の違いと旬について理解する ・食器の並べ方について発表する	・年中行事で食されている食材の地域的違いから，郷土料理と旬を理解させる ・配膳についての事柄を使って質問する ＊　和食器・洋食器の配膳方法について理解できたか （知識・理解）
まとめ 10分	本時のまとめ	・本時の学習内容を理解する ・次時の内容を確認する	・学習内容のまとめをする ＊　行事食と旬の食材の関連から和食器の配膳について理解できたか （知識・理解） ・次時の予告をする

一般生との差が小さくなった。

まず，帰国生ではプレテストとポストテストとの間に0.1％水準で有意差が認められ，プレテストと定着度テストとの間に５％水準で有意差が認められた。この結果より授業後の成績がプレテストより上がっていることで，定着していることが判明した。一般生に関してはプレテストとポストテストとの間に0.1％水準で有意差が認められた。

また，ポストテストと定着度テストとの間に５％水準で有意差が認められているが，この結果は成績が下

がったことによる有意差が認められたと判断できる。しかし，全体的に見ると，プレテストから定着度テストとの間に１％水準で有意差が認められた。プレテストよりポストテストの結果の方が高得点であるが，定着度テストの結果がやや下降傾向にある。しかし，プレテストより定着度テストの結果が良いことは，学習前よりも知識の定着が図られていることが明らかとなった。

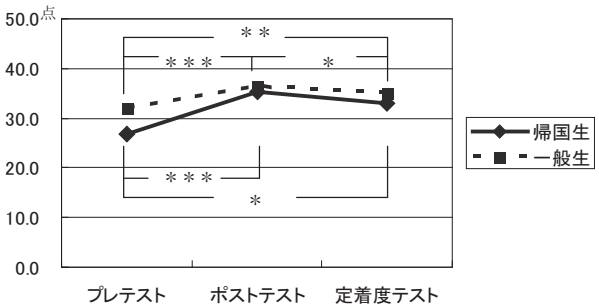

図１　知識テストの合計得点

２．配膳についての理解度

図２に示す「配膳に関するテストの点数」のテスト内容としては，洋食器のフォークとナイフの使う順番，食事を終えたときと食事中であるということを表す置き方，和食器の配膳と箸の置き方などについて５つの問いを作成し，10点満点とした。プレテストでは帰国生6.2点，一般生5.4点，ポストテストでは帰国生7.3点，一般生6.8点，定着度テストでは帰国生6.8点，一般生7.0点という結果であった。

帰国生は一般生よりプレテストとポストテストで高い正解率となった。t 検定の結果，帰国生では有意な差は認められていないが，一般生ではプレテストとポストテストとの間，プレテストと定着度テストとの間で0.1％水準で有意差が認められ，知識の定着がみられた。

次に，指導方法の違いによる配膳についての理解度をクラス別で比較した。

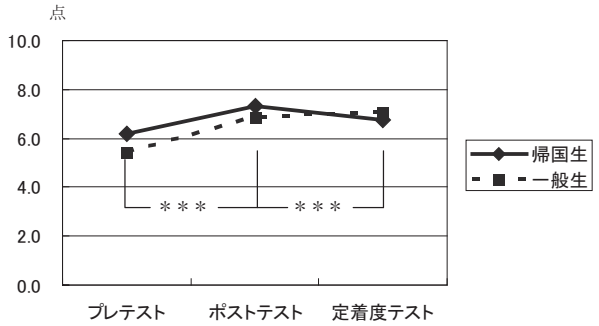

図２　配膳に関するテストの点数

図３に示す「配膳に関するテストの点数（クラス別）」より，国際理解教育クラスの帰国生はプレテストよりもポストテスト，さらに定着度テストで知識の向上が見られるが，有意差は認められなかった。一方通常教育クラスの帰国生は，プレテストよりポストテストのほうが知識の向上が見られたが，定着度テストで知識の低下が見られた。このことは，通常教育クラスはポストテスト前に期末テストがあり，国際理解教育クラスは定着度テスト後に期末テストが実施されていたことに起因すると考える。

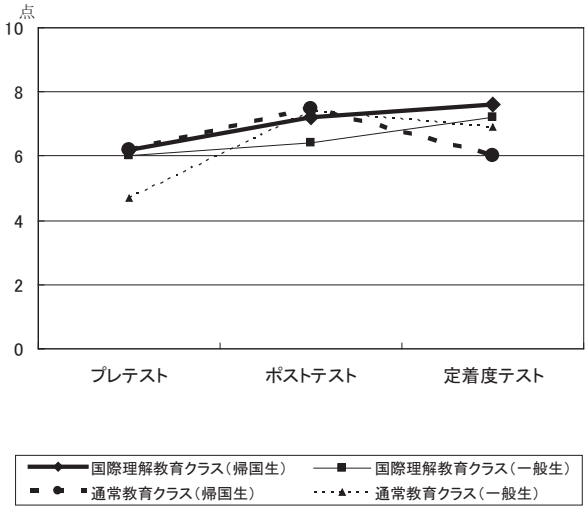

図３　配膳に関するテストの点数（クラス別）

しかし，図４より「食生活の現代的問題に関するテストの点数（クラス別）」においては，どちらの帰国生もプレテストよりポストテストに知識の向上が見られたが，定着度テストで知識得点が低下したという結果がでた。

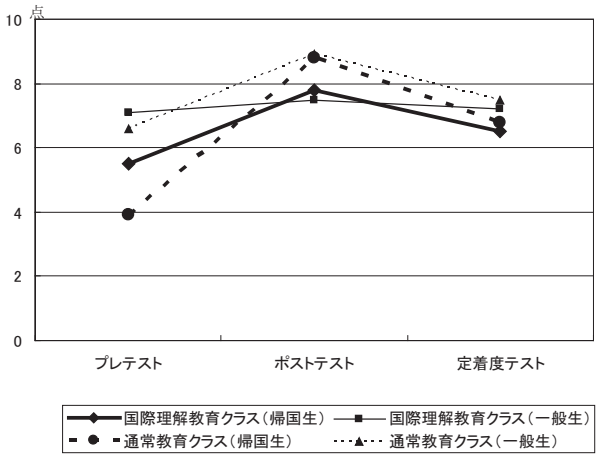

図４　食生活の現代的問題に関するテストの点数（クラス別）

以上の結果より，各国の食生活の比較をしながら授業を進めたクラス（国際理解教育クラス）の帰国生は，定着度テストにおいて知識の定着が認められた。この理由として考えられるのは，国際理解教育の視点を取り入れたことで，帰国生が現地の食生活を発表し，相互に意見の交流をすることにより，国により食事の環境が違うことを知ることができたからである。帰国生，一般生が相互啓発をすることができたため，知識の定着に良い影響を与えたといえる。

3．食生活意識の実態

食生活意識の実態に関するアンケートを「よくする」から「しない」の４件法で回答してもらった。そのうち表３，図５，図６は「時々する」と「よくする」をまとめた図表である。

表３の食事や栄養に関する情報源の項目（d ～ j）は帰国生より一般生のほうが高い割合を示した。一般生は日本のマスメディアの影響を受けていることが大きな要因になっていることが考えられる。表３の食事における家族との関わりの項目（k ～ n）において，帰国生の方がよく話をしていることが多いことが明らかとなった。この結果は，帰国生のほうが一般生より家族との関わりが深いということが推測される。

図５に国際理解教育クラスの手伝い状況と図６に通常教育クラスの手伝い状況を示した。国際理解教育クラス及び通常教育クラス共に「配膳を考え並べている」という項目の２回目調査において帰国生と一般生との間に有意差が認められた。２回目の調査というのはどちらのクラスも食物の授業が終了した後にデータを取った。表３の「食物知識における情報源と家族とのかかわり」の「h」「i」の項目からも，帰国生より一般生のほうが家庭科の授業で知識を習得をしているという結果が認められた。家庭科の授業により，一般生は「配

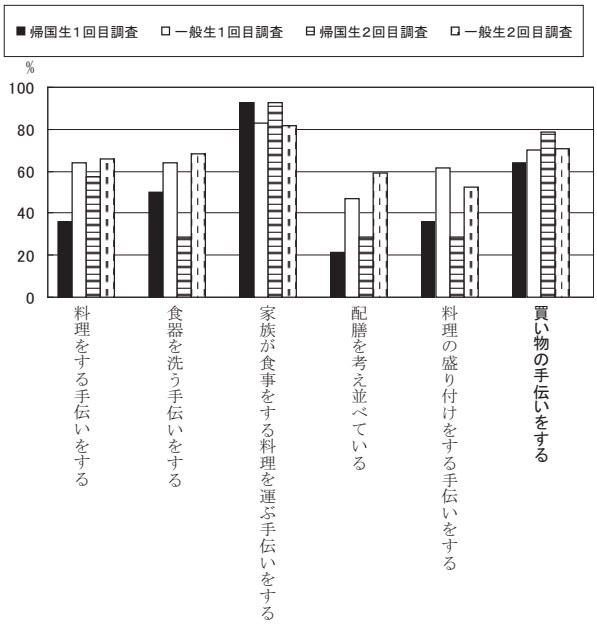

図５　国際理解教育クラスの手伝い状況

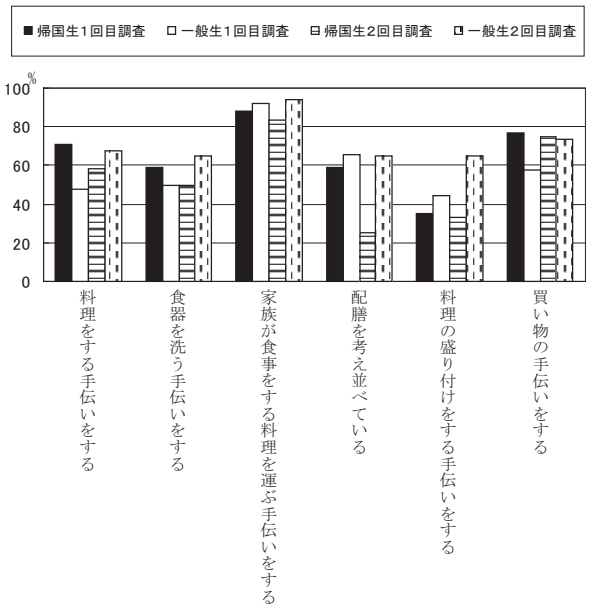

図６　通常教育クラスの手伝い状況

表３　食物知識における情報源と家族とのかかわり

		帰国生（%）	一般生（%）
a	年中行事を家族揃ってお祝いする	57	69
b	一人で食事することがある	35	33
c	家族が一緒に食事をする	67	84
d	食事や栄養の知識はテレビから得ている	33	58
e	食事や栄養の知識はインターネットから得ている	5	16
f	食事や栄養の知識は新聞から得ている	10	15
g	食事や栄養の知識は雑誌から得ている	24	28
h	食事や栄養の知識は小学校の家庭科から得ている	33	46
i	食事や栄養の知識は中学校の家庭科から得ている	33	41
j	食事や栄養の知識は家庭科の授業以外から得ている	43	45
k	家族から食事のバランスについていわれる	81	67
l	家族から栄養についていわれる	81	60
m	家族から食事のマナーついていわれる	86	80
n	家族が自分のために食事を作ってくれる	100	97

膳を考え並べている」ということが明らかとなった。また，帰国生の食物知識に関する情報源は家族であり，家族から得た情報源を家庭科の授業と結びつけ知識に繋げていると推測する。

Ⅴ　考察

栄養や食事のマナーに関することを家族から言われるという項目において，帰国生のほうに回答率が高い理由は，海外に勤務する人びとはかつての管理層を中心とするエリートグループが多いことから[8]，食事作法や栄養など料理に関することを家庭で学んでいることが考えられる。帰国生がプレテストにおいてマナーに関する内容の知識が高かったこともこれらのことからも裏付けられている。

プレテストにおいて，帰国生は家庭科の授業を受けてきていないにも関わらず，一般生と知識の差がほとんどない理由は家庭の影響があると考えられる。また，定着度テストにおいて知識の定着が認められたのは，国際理解教育の視点を取り入れ，相互啓発しながら授業を進めるほうが知識の定着が良いことが明らかとなった。帰国生自らが経験的に学習していく中で，学習したものを自分で構造化していくという学習スタイルと，一般生の定型化された学習課題を規則的，系統的に学習していくという学習スタイルを組み合わせた授業方法が国際理解教育の「共生」という視点につながる。「共生」の意味の一つとして「他者を発見すること」とあるが，他者理解をする以前に自分自身が何かをみつめなおすことが必要であると考えられる[9]。

今回の配膳に関する学習において，各国に滞在していた生徒に海外の食事の実態を聞き，今までの自分の生活を見直すことが，まず自分自身をみつめなおすことになった。また，一般生にも日本の食文化について普段あまり意識していないが，改めて振り返るよう導入で指導したことで，帰国生は日本の食生活を知り，一般生は自分の国の食事について再確認したこと，また，帰国生の現地での食事について違いを生徒自身で確認しあえたことが，知識の定着に影響したのではないかと推測する。

Ⅵ　要約

国際理解教育の視点を取り入れた授業を実践した結果，以下のことが認められた。

1．国際理解教育クラスでは，配膳の理解の定着において，プレテストよりも平均点の向上がみられ，帰国生・一般生共に授業の効果が認められた。
2．国際理解教育に視点をあてた国際理解教育クラスでは，帰国生の自主性・積極性といった特性を活かし一般生と相互啓発することで，通常教育クラスより知識の定着が図れた。
3．「食物知識における情報源と家族とのかかわり」から，一般生はテレビや授業により，帰国生は，家庭生活の影響を受けていることが認められた。

配膳や箸の置き方に関して一般生より帰国生がプレテストで成績が良いのは，家庭で配膳に関しての会話をしていることが多いというアンケートの回答からも明白となった。また，帰国生は家庭科の授業の経験に関わらず，食生活や食物領域に関する知識を家族から得ているため，一般生との知識差が小さいことが明らかとなった。

今後は他分野で国際理解教育の視点を取り入れた相互啓発することができる授業を行い，知識の定着が今回と同様の結果となるかを確認し，生徒が楽しいと感じる授業を検討したいと考えている。

Ⅶ　引用文献

1　http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/004/001/001/002.pdf
海外在留邦人数及びその同伴する義務教育段階の子どもの数の推移
（最終確認　平成21年1月19日）
2　平野吉三　「国際人事管理時代」株式会社栄光出版社，1984年
3　http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/004/001/001/005.pdf
就学形態別　海外の子ども（義務教育段階）の数の推移
（最終確認　平成21年1月19日）
4　横浜国立大学教育学部附属鎌倉中学校「帰国生の特性が生きる国際理解教育」
明治図書出版株式会社，1991
5　佐藤郡衛　「多文化共生社会の学校づくり　国際理解教育」株式会社　赤石書店　2001
6　前掲書5）
7　佐藤郡衛　「『共に生きる子ども』を育てる国際理解教育」教育出版株式会社　2006
8　小林哲也　「海外子女教育・帰国子女教育」1981

Ⅷ　参考文献

1　足立己幸，NHK「子どもたちの食卓」プロジェクト「知っていますか子どもたちの食卓―食生活から体と心がみえる―」日本放送出版協会　2000年

2　原真 「帰国子女教育の実践目標としての特性の保持・伸長」，東京学芸大学海外子女教育センター『国際化時代の教育』，創友社，1986年
3　中西晃 「海外子女教育から見た問題」， 中西晃・西村俊一編著 『国際教育の創造』，創友社，1990年
4　小林一光 「『共に生きる子どもを育てる』を育てる国際理解教育」 教育出版　2006年
5　江淵一公 「異文化間教育研究入門」 玉川大学出版部 1997年

Ⅸ　謝辞

調査に協力頂いた学生の皆様に深謝いたします。また本研究にあたり，助言を頂いた山本厚子先生に深謝いたします。

本研究の一部は，日本家庭科教育学会第52回大会（2009年6月27日）において発表した。